

和歌山県文化財センター年報

1995

財団法人 和歌山県文化財センター

目 次

巻頭図版

- | | |
|---------------|-----------|
| 1. 紀伊国分寺塔跡基壇 | 3. 長樂寺仏殿 |
| 2. 新宮城（丹鶴城）出丸 | 4. 普賢院四脚門 |

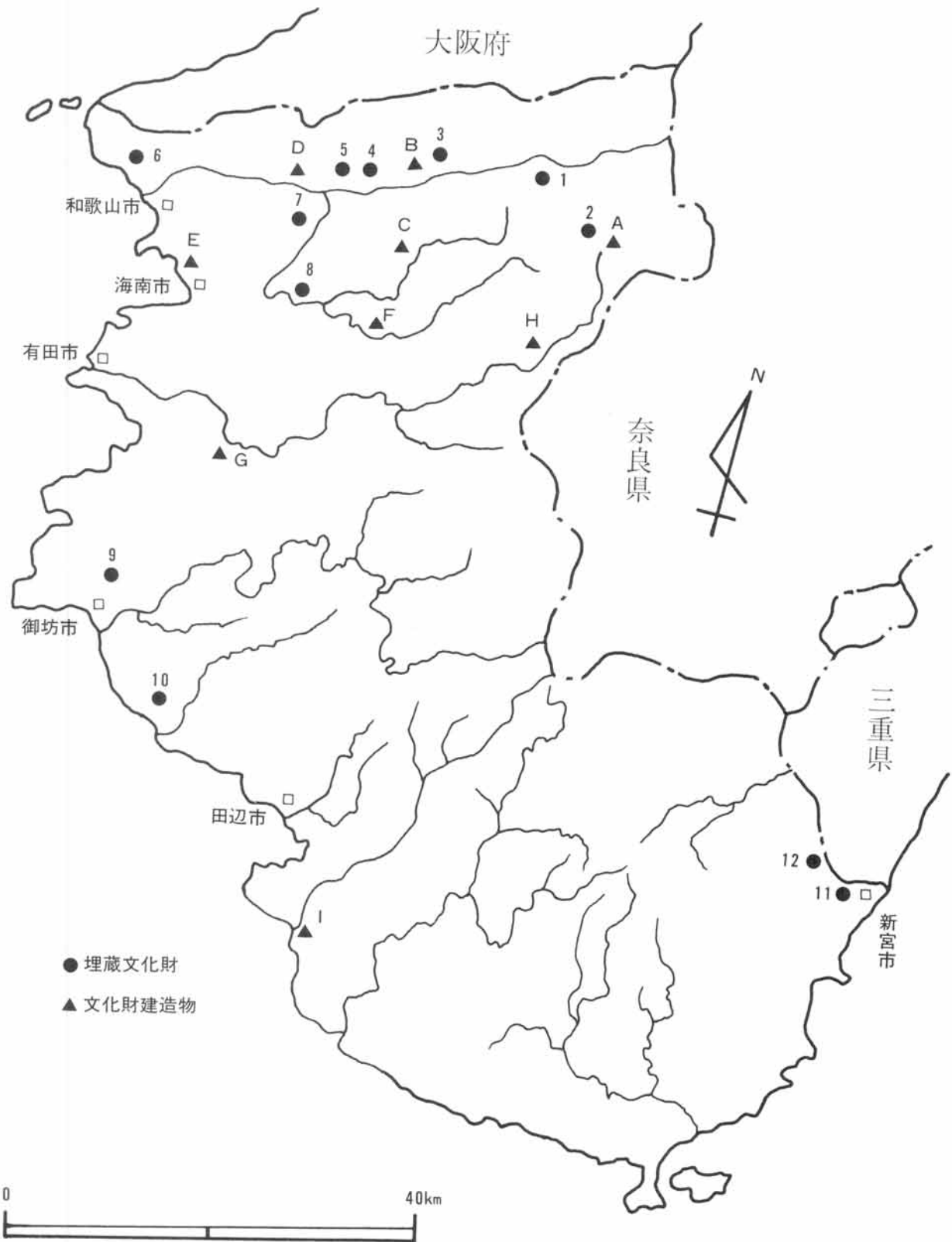
平成7年度財団法人和歌山県文化財センター受託事業一覧…………… 1

埋蔵文化財・発掘調査

高尾遺跡……………	2
華岡清州・春林軒塾……………	3
紀伊国分寺塔跡……………	4
根来坊院跡（県道泉佐野岩出線）……………	5
西庄遺跡（試掘）……………	6
西庄遺跡（第1次）……………	7
北山廃寺（第3次）……………	8
溝ノ口遺跡（第2次）……………	9
小松原II遺跡（湯河氏館跡）……………	10
新宮城（丹鶴城）跡……………	11
根来坊院跡（大谷川）……………	12
近畿自動車道南部I・C予定地内遺跡確認・分布調査……………	12
熊野本宮大社旧社地大斎原……………	12

文化財建造物・保存修理

金剛峯寺不動堂	国宝……………	13
粉河寺庭園（六角堂）	国指定名勝……………	14
金剛峯寺大主殿 他	県指定文化財……………	14
納淵八幡神社本殿・大日堂	重要文化財……………	15
普賢院四脚門 他	重要文化財……………	16
十三神社本殿 他	重要文化財……………	17
力侍神社本殿 他	県指定文化財……………	18
雨錫寺阿弥陀堂	重要文化財……………	19
海禅院多宝塔	和歌山市指定文化財……………	20
長樂寺仏殿	重要文化財……………	22
日神社本殿	県指定文化財……………	23
（財）和歌山県文化財センター平成7年度概要……………		24



受託事業 所在地一覧



紀伊国分寺跡塔跡基壇



新宮城（丹鶴城）出丸



長樂寺仏殿



普賢院四脚門

平成7年度(財)和歌山県文化財センター受託事業一覧

事業の名称		所在地		契約期間	規模	委託機関
埋蔵文	宅地造成に伴う高尾遺跡発掘調査	伊都郡高野口町	1	7.4.20~7.10.31	1,314 (㎡)	榊田開発株式会社
	金剛峯寺遺跡(尼僧研修道場)第2次出土遺物整理	伊都郡高野口町	2	7.5.25~8.3.30		財団法人高野山文化財保存会
	華岡青州・春林軒塾発掘調査	那賀郡那賀町	3	7.7.11~8.3.22	700	那賀町教育委員会
	紀伊国分寺跡(塔跡)発掘調査	那賀郡打田町	4	7.8.15~7.12.22	375	打田町教育委員会
	大谷川都市砂防事業及び特定河川等環境整備に伴う根来寺坊院跡発掘調査	那賀郡岩出町	5	7.5.24~7.10.31	225	和歌山県岩出土木事務所
	県道泉佐野岩出線改良工事に伴う根来坊院跡発掘調査	那賀郡岩出町	5	7.6.1~8.3.20	2,720	和歌山県岩出土木事務所
	西脇山口線道路改良工事に伴う西庄遺跡試掘調査	和歌山市	6	7.4.20~7.10.31	1,067	和歌山県和歌山土木事務所
	西脇山口線道路改良工事に伴う西庄遺跡第1次発掘調査	和歌山市	6	7.12.1~8.3.31	760	和歌山県和歌山土木事務所
	北山廃寺跡第3次発掘調査	那賀郡貴志川町	7	7.7.28~8.3.15	284	貴志川町教育委員会
	団営農道整備事業(棕木線)道路新設に伴う溝ノ口遺跡第2次発掘調査	海南市	8	7.12.15~8.3.28	852	海南市
	体育施設整備事業に伴う小松原II遺跡発掘調査	御坊市	9	7.12.21~8.3.31	650	和歌山県教育庁総務課
	近道南部I・C予定地内所在遺跡確認・分布調査	日高郡南部町・南部川村	10	8.1.10~8.3.25	発掘面積234	和歌山県土木部
高田遺跡・高田土居遺跡・徳藏遺跡新宮城(丹鶴城)跡発掘調査	新宮市	11	8.1.29~8.3.31	750	新宮市教育委員会	
河川改修に伴う熊野本宮大社旧社地大斎原試掘調査	東牟婁郡本宮町	12	8.1.8~8.3.25	237	和歌山県新宮土木事務所	
建造物	県指定文化財金剛峯寺大主殿他保存修理設計監理	伊都郡高野町	A	7.7.1~8.3.31	7棟	宗教法人金剛峯寺
	国宝金剛峯寺不動堂保存修理設計監理	伊都郡高野町	A	7.10.1~8.3.31	1棟	宗教法人金剛峯寺
	重要文化財普賢院四脚門他2棟保存修理設計監理	伊都郡高野町	A	7.4.1~8.3.31	4棟	財団法人高野山文化財保存会
	国指定名勝粉河寺六角堂庭園緊急修復設計監理	那賀郡粉河町	B	7.4.1~8.3.31	1棟	宗教法人粉河寺
	重要文化財鞆淵八幡神社本殿、大日堂保存修理設計監理	那賀郡粉河町	C	7.10.1~8.3.31	2棟	宗教法人鞆淵八幡神社
	県指定文化財力侍神社本殿他保存修理設計監理	和歌山市	D	7.6.30~8.3.31	2棟	宗教法人力侍神社
	市指定文化財海禪院多宝塔保存修理設計監理	和歌山市	E	7.12.1~8.3.31	1棟	宗教法人海禪院
	重要文化財十三神社本殿他保存修理設計監理	海草郡美里町	F	7.10.1~8.3.31	3棟	宗教法人十三神社
	重要文化財長樂寺仏殿保存修理設計監理	有田郡吉備町	G	7.4.1~8.3.31	1棟	宗教法人長樂寺
	重要文化財雨錫寺阿弥陀堂保存修理設計監理	有田郡清水町	H	7.10.1~8.3.31	1棟	宗教法人雨錫寺
	県指定文化財日神社本殿保存修理設計監理	西牟婁郡白浜町	I	7.4.1~7.2.29	1棟	宗教法人日神社

たかお いせき 高尾遺跡の発掘調査

高野口町大字名古曾字高尾に所在する高尾遺跡で、宅地造成に伴い面積約1,300㎡の発掘調査を実施した。遺跡は河岸段丘の北西隅に位置し、遺跡の西側—現在は道路となっている—には、昭和初期まで北東から南西方向に小河川が南流していた。調査前の現状は宅地及び畑地である。調査区の西側約1/3は家屋等により遺構は既に破壊されていた。調査の結果、主として弥生時代と室町時代の遺構を検出した。

弥生時代の遺構には竪穴住居・土坑・溝がある。竪穴住居は南西側に2回拡張を行っている。直径は拡張前が8m、2回目の拡張後で9mの規模をもち、壁高は約30cm遺存していた。支柱穴は8本と考えられ、柱の直径は約20cm、深さは60cm前後である。遺物は搬入品を含む弥生時代中期の土器や石器の他、サヌカイトの剥片・碎片が多量に出土している。

室町時代の遺構には掘立柱建物・土壙墓・土坑・堀がある。掘立柱建物は、3間×2間、2間×2間以上、2間×1間、3間×2間以上の計4棟を検出している。この内、3間×2間の建物の柱掘方は方60cm前後、柱の太さが直径20~30cmと比較的大きい。今回検出したこれらの建物は、近世初頭の文献や建物の規模・位置及びその時期等から、高野山の根本荘園であった官省符庄の庄官である塙坂（はねさか）氏の館跡と考えられる。

（井石 好裕）



高尾遺跡検出遺構（上空 西から）

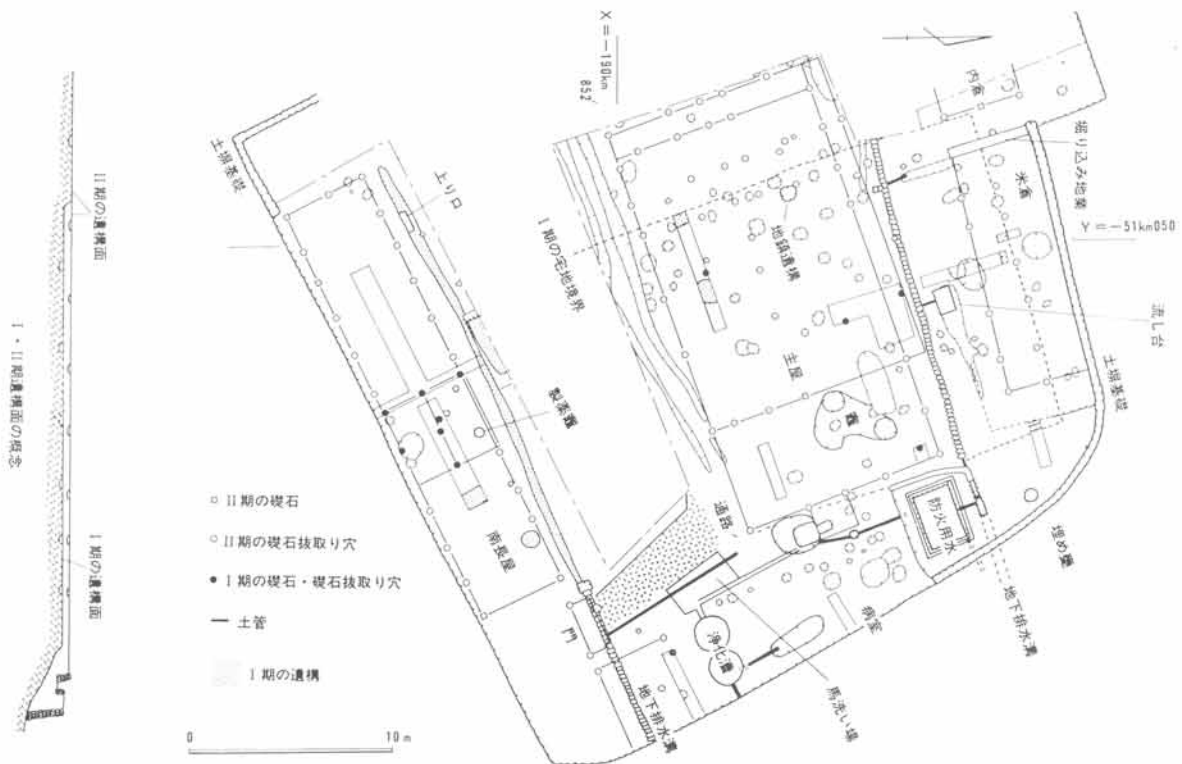
は なお かせ いしゅう しゅんりん けん じゅく
華岡青洲・春林軒塾の発掘調査

春林軒塾は華岡青洲がひらいた住居兼病院・医学塾である。文化元年（1804）年の全身麻酔下での乳癌手術の成功後、青洲の名声は全国にひろまり、明治15年までに延べ2,000人近くの塾生がこの地で医術を学んだという。やがて西洋医学が主流になると塾はその使命を終え、大正12年に塾は廃絶してしまい、跡地は畑となっていた。

発掘調査の結果、塾は居宅兼治療の場である主屋のほか、病棟や製薬・講義をおこなう建物を備えた本格的な医療施設であることが判明した。これらのほか、塾内には数棟の倉があったようであるが、これは華岡家の大地主としての側面を物語るものであろう。これら建物の雨水はことごとく宅地外に排出されるように下水施設が整備され、防火用水や浄化槽を備えている。また、便所は二次感染を防ぐために据置式のもの采用されているとみられる。

このように塾は防火・衛生面に配慮した医療施設としての優れた設計思想に基づいて作られている。こうした、諸施設の下層にやや小規模な宅地と建物が発見された。この下層の宅地を埋め立てた土から青洲が考案した医療器具が出土したため、下層の建物は初期の塾跡であることが判明した。初期の塾は出土遺物から見て、18世紀末のものと判断される。したがって、青洲が最初に手術に成功したのは、この下層の塾であり、上層の諸施設は手術成功を契機に拡張されたものといえよう。

(武内 雅人)



春林軒塾跡の構造

紀伊国分寺（塔跡）の発掘調査

今までに判明していたこと

紀伊国分寺跡の推定寺域は、二町四方とされる。伽藍区域は西側4分の3の地域をあて、南から南門・中門・金堂・講堂・僧房を一直線に配し、金堂の南東部に塔を、金堂と講堂の間には、左右に鍾樓と経藏を置く。中門と講堂は回廊でつながれ、講堂と僧房は軒廊でつながる。出土瓦の検討から、767年には、ほぼ国分寺の主要伽藍が完成して10年が経過しており、塔、金堂や講堂など主要伽藍をつくり、鍾樓や南門は、一時期新しく造られている点が明らかにされている。

今年度の調査でわかったこと

今年度の塔跡の発掘調査は、史跡整備のための調査で、瓦積み基壇の復元整備を実施した。塔跡の現状は、巨大な心礎のほか16個の礎石が旧状を保って残っている。礎石配置は、3間（10尺+11尺+11尺+10尺）四方である。基壇は、一辺が16.39m（55尺）の方形であり、厚さ2.5～8cm前後で塔周辺部の地山であるシルト層と粘質土層を交互に叩きしめ、さらに部分的に約15cm大の扁平な川原石を入れ構築している。四辺の化粧は、地山上に直接、半裁した平瓦を積み上げる。瓦積み基壇にはうらごめ土が使用され、また各隅の補強の為か、平瓦を打ち欠いて入れている。

瓦積み基壇の北面は、31枚の平瓦が1.05mの高さで残存していた。また塔建設の際の四隅の目印として置かれた軒平瓦が、北西隅・南西隅・南東隅の三ヶ所で確認できた。雨落ち溝は、東面瓦積み基壇から85cmの位置で確認できる。北面には、創建期より新しい平安時代初期に、1.35mの幅を持つ階段が取付けられている。出土遺物からみて焼失した平安時代初期以降は、塔の再建はなされていない。礎石配置や基壇の大きさから推定される七重塔の復元高は、160尺（約48.5m）ないし220尺（約66m）とされる。

（波谷 高秀）



紀伊国分寺塔跡

ねごろぼういんあと 根来坊院跡（県道泉佐野岩出線）の発掘調査

今回の調査地区は、根来寺の中心部から南々西に約1.4km離れたところにある。調査地は、第3次調査地（平成6年度）を挟んで北側と南側に分かれる。北側調査地の現状地形は、水田・宅地で5段の段差から成り、調査地の北と南で約5mの高低差がある。

北側調査地 遺構は、縄紋時代の土坑、鎌倉時代から室町時代の柱穴群・井戸・溝・土坑・土壙墓、西側の丘陵裾に沿う室町時代の堀・土橋などが中心となり、室町時代から江戸時代の田畑の鋤溝をも明らかにしている。出土遺物は、各時代の遺構・遺物包含層から多量に出土している。大半は、鎌倉時代後期から室町時代前期の土器類で占められている。室町時代の井戸や遺物包含層からは、本来の遺構の時期の遺物に混じって、県内で2例目の陶棺の破片が出土している。

南側調査地 遺構は、旧淡路街道に沿う室町時代の堀・土橋などが中心となる。堀は調査地の全域にかかり、東西方向に二ヶ所見つかっている。北側調査地の堀に較べて大規模で、北側の丘陵と従来調査されてきた中世根来寺の町屋をも取り囲む外堀と推定され、中世根来寺を考える上において重要かつ、画期的な発見である。今後、中世根来寺の城砦化を多面的に捉えていく必要を示唆するものである。

西側の堀は幅約19m・深さ2.8m、東側の堀は幅約16.2m・深さ2.0～3.5mある。出土遺物は13世紀代の物を含み、16世紀末～17世紀前半を主体としている。遺物のうち木製品では独楽・曲物・曲物の底板・桶の側板・下駄・加工材、獣骨などがまとまって出土している。東側は現在の田畑の区画から、さらに調査地外へ続くことが確認でき、中世根来寺の町屋の入口の方向に続くことが確認できる。堀には通路となる「土橋」を掘り残して造り出している。土橋の幅は、7.6～8.0mを測り、非常に広い感を与える。

なお、既往の調査成果を考え合わせると、調査地内から縄紋時代から弥生時代にかけての遺構・遺物が確認されており、当時から人々が生活していたことが考えられる。



南側調査地 土橋と堀

（土井 孝之）

にしおしょういせき
西庄遺跡の試掘調査

調査の経緯

都市計画西脇・山口線道路改良に伴う道路予定地がその対象であることで、幅2m、東西約600mにわたって遺構・遺物の確認調査をおこなった。調査面積は1,067㎡である。

調査の主な結果

Qトレンチ（阿部地区） 遺構は竪穴住居1棟、掘立柱建物2棟以上を検出した。竪穴住居からは、古墳時代の製塩土器、須恵器のほか、魚撈具として銚、釣針、土錘、擬似餌などが豊富に出土している。自然遺物としては、サザエ、ハマグリ、アカガイ、バイガイ、ガンガラ等の貝類のほか魚類としてはカツオ、サメ、マグロ、タイ、コチ、アジ、イワシ、サバ、トビウオ、サワラ等が出土している。

Rトレンチ（野島地区） 古墳時代の包含層中には2面にわたって石敷炉4基以上が検出できた。地山面にも石敷炉が存在するため合計3面確認している。いずれも古墳時代の炉と見られる。遺物は、多量の製塩土器と須恵器が出土している。魚撈具は土錘、鹿角製の擬似餌等が出土している。自然遺物はハマグリ、サザエ等が出土している。

Sトレンチ 古墳時代の包含層が存在する。包含層下には石敷炉を4基以上検出した。炉の周囲は粘土で構築された付属施設が認められる。下層も製塩炉が存在していることを確認している。

まとめ 今回の調査で、西庄遺跡は古墳時代を中心とした漁業と土器製塩を生業とした紀伊を代表する大規模な集落であることが判明した。

(富加見 泰彦)



土錘・擬似餌・釣針・銚



石敷炉

にししょういせき 西庄遺跡の第1次発掘調査

西庄遺跡は和歌山市本脇地区に所在し、砂嘴上に立地する海浜遺跡である。この西庄遺跡の中央部を東西方向に横断する県道の拡幅工事が計画されたため、遺跡の範囲及び内容を把握する目的で、確認（試掘）調査が実施された。調査の結果、古墳時代及び中世の遺物包含層が確認され、遺跡の範囲は東西約500mに及ぶことが明らかになった。

今回の発掘調査地点は、試掘調査において包含層が確認され、全面調査が必要と判断された範囲の中で最も東に位置する。調査対象面積は約760㎡で、現況は宅地及び畑地である。調査地点は遺跡の縁辺部にあたるため、総ての地区で遺構及び遺物を検出したが、遺構の密度も薄く、出土遺物もさほど多くない。

検出した遺構には、土坑・溝状遺構・井戸がある。溝状遺構は検出状況等から判断して、現在の畑地より一時期古い段階の畑作に伴う耕作痕と考えられる。遺物には、中世（13～15世紀代）の瓦器・土師器・陶磁器等を中心として、近世から近代にかけての陶磁器・瓦の他、古墳時代の須恵器・製塩土器などがある。

（井石 好裕）



西庄遺跡検出遺構（上空 北から）

きたやまはいじ 北山廃寺の第3次発掘調査

これまでの調査で、塔跡、中門瓦溜り（中門未検出）、回廊跡、西限の溝をそれぞれ確認している。しかしながら、塔跡を除く主要伽藍の確認ができていないため、今年も主要伽藍の検出に重点をおいた。

講堂を検出するために設定したトレンチでは、講堂に取り付くと見られる回廊部分を検出した。回廊は東へ折れ曲がり講堂への取り付け部分と考えられる。検出した回廊は幅約3mで両側に溝を有し、初年度に検出した回廊の規模と同様である。平瓦の多くは一枚作りで8世紀以降のものと見られ、これまでに検出した回廊に伴う溝出土の瓦の年代とは若干の齟齬があるが、これは講堂が主要伽藍のなかで最後に建立されたことを示唆するものであろう。

これまでの3年間の調査の結果をまとめると

- (1) 奈良県明日香所在の坂田寺の系統の瓦を有する白鳳時代の寺院であること。
- (2) 伽藍配置は塔、金堂、講堂が南北に一直線に並ぶ四天王寺式の蓋然性が高いこと。
- (3) 建立は、7世紀中頃に紀伊では西国分廃寺、最上廃寺と並び、早くに建立されたと考えられること。



- (4) 寺域は東西が一町以上、南北が一町の規模を有し、大規模な整地が行われていること。
- (5) 寺院は少なくとも出土した土器、瓦から13世紀まで法灯が絶えていなかったと考えられる。
- (6) 奈良時代の瓦塔が出土したことは、北山廃寺では8世紀以降本来の仏教施策とは別に自利的信仰へと次第に変容していったことを示す重要な事柄であると考えられる。

以上のことから紀伊を代表する重要な古代寺院であることが明らかとなった。

(冨加見 泰彦)

回廊と溝

溝ノ口遺跡の第2次発掘調査

溝ノ口遺跡は、海南市溝ノ口地内、貴志川の北岸段丘上に所在しており、これまでの調査において縄紋時代後期から晩期にかけての配石遺構・住居跡・土器棺墓、弥生時代中期の住居跡、平安時代の建物跡など数多くの遺構・遺物が見つかった。

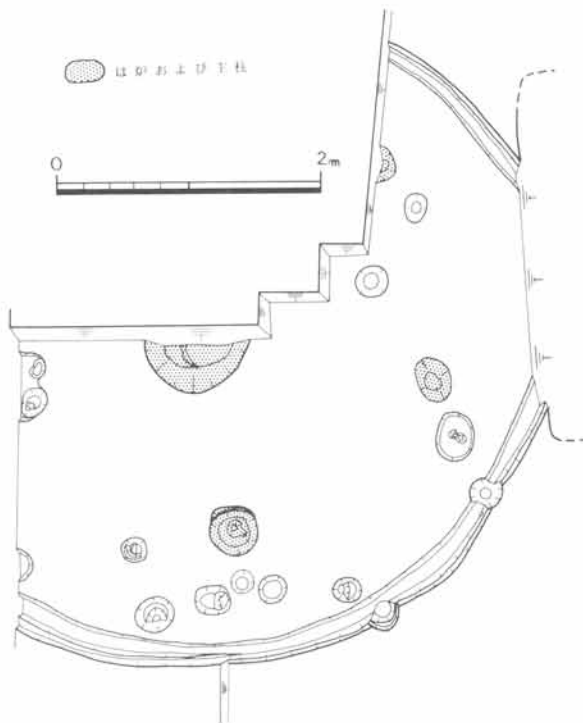
今回の調査は、昨年度調査区の東および西側に当る地点で、調査面積は約850㎡である。

出土した遺物には、縄紋土器・弥生土器・黒色土器・瓦器などの土器類の他に石鎌・石斧などの石器類があるが、中でも縄紋土器が多数を占める。

遺構では、縄紋時代の土器棺墓・土坑、弥生時代の竪穴住居跡、中世の溝などを検出している。このうち土器棺墓は、下の写真のように粗製の深鉢と浅鉢を組合わせたもので、縄紋時代後期のものと考えられる。住居跡は、図示したように直径5m前後の円形で、中央部に直径80cm、深さ40cmほどの炉を持つものである。主柱については5本になるものと推定している。もっとも残りのよい部分で壁面は20cmほどである。埋土は単一の黒褐色土で、この中から弥生時代中期（Ⅲ様式新段階）と思われる壺・甕片が出土している。

なお、縄紋時代の遺構・遺物に関しては調査区を横断する小さな谷をはさんでのその密度に著しい違いがあり、このことからこの時期の集落の東限は、この自然地形である小規模な谷にあっ

たと考えられる。一方弥生時代について言えば、遺跡範囲の西端部に当る場所において今回住居跡が検出されている。このことからこの時期の集落については、さらに西側に広がっている可能性が高く、今後遺跡の範囲を見直す必要があるものと思われる。
(村田 弘)



弥生時代の住居跡



縄紋時代の土器棺墓

こまつばら ゆかわしやかたあと 小松原II遺跡（湯河氏館跡）の発掘調査

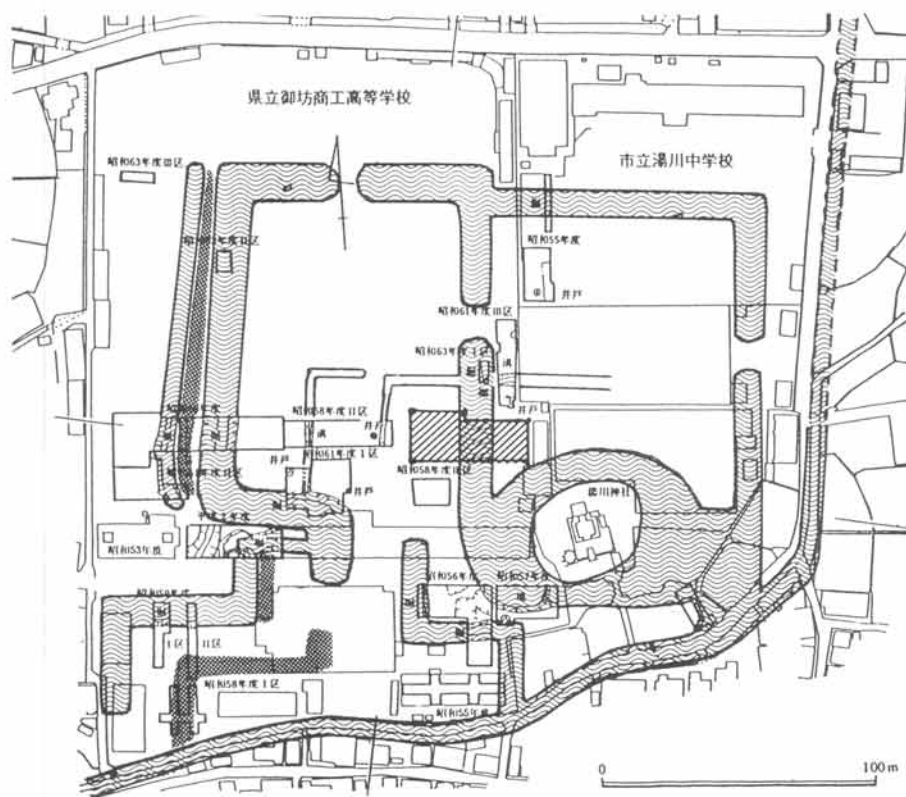
調査は、県立御坊商工高校の格技場等建設に伴い実施した。調査区は、小松原II遺跡と湯河氏館が重複する地点に該当する。小松原II遺跡は日高川流域の弥生時代の拠点集落として、また湯河氏館跡は室町時代の在地豪族湯河氏の小松原館跡として周知されている。調査の結果、弥生時代土坑・溝、室町時代の堀、江戸時代の土坑を確認した。

弥生時代の小松原II遺跡・環濠の復元

和歌山県の拠点集落の動向は、弥生時代前期から中期まで継続し、中期末から後期前半にかけては高地性集落に移動するが、日高川水系も同様で、小松原II遺跡のすぐ北の丘陵上に位置する亀山遺跡に移動する。現在までの考古資料と現地形を参考にしながら、小松原II遺跡の環濠を復元すると、標高5m前後の自然堤防上を中心に立地する東西400m、南北300mの規模を持つ大規模な集落であることが推定できる。

湯河氏跡の復元

文献によれば、湯河氏館跡の成立時期は、天文18（1549）年といわれる。しかし、今回の調査例や現在までの考古資料の蓄積からみれば、湯河氏の館跡かどうかは不明ながら、鎌倉時代までさかのぼる寺院跡と推定できる遺構が存在していた事は間違いない。湯河氏に関連する遺構は、大きな堀と小さな溝、土塁及び井戸の存在である。外敵から内部を防御する堀と土塁の存在、さ



らに内部を区画し、排水の機能も合わせもった溝の存在、さらに生活を営むうえで必要不可欠な水、井戸の存在である。現在までの考古資料の蓄積で湯河氏館跡を推定すると、東西200m、南北200mで約4万m²の規模をもつ館跡が復元できる。

（渋谷 高秀）

新宮城（丹鶴城）出丸の発掘調査

「出丸」は熊野川と船着場を見下ろす位置にある独立した小規模な廓である。このような独立した廓は近世城郭では珍しく、出丸は城郭研究者により予てから注目されていた。

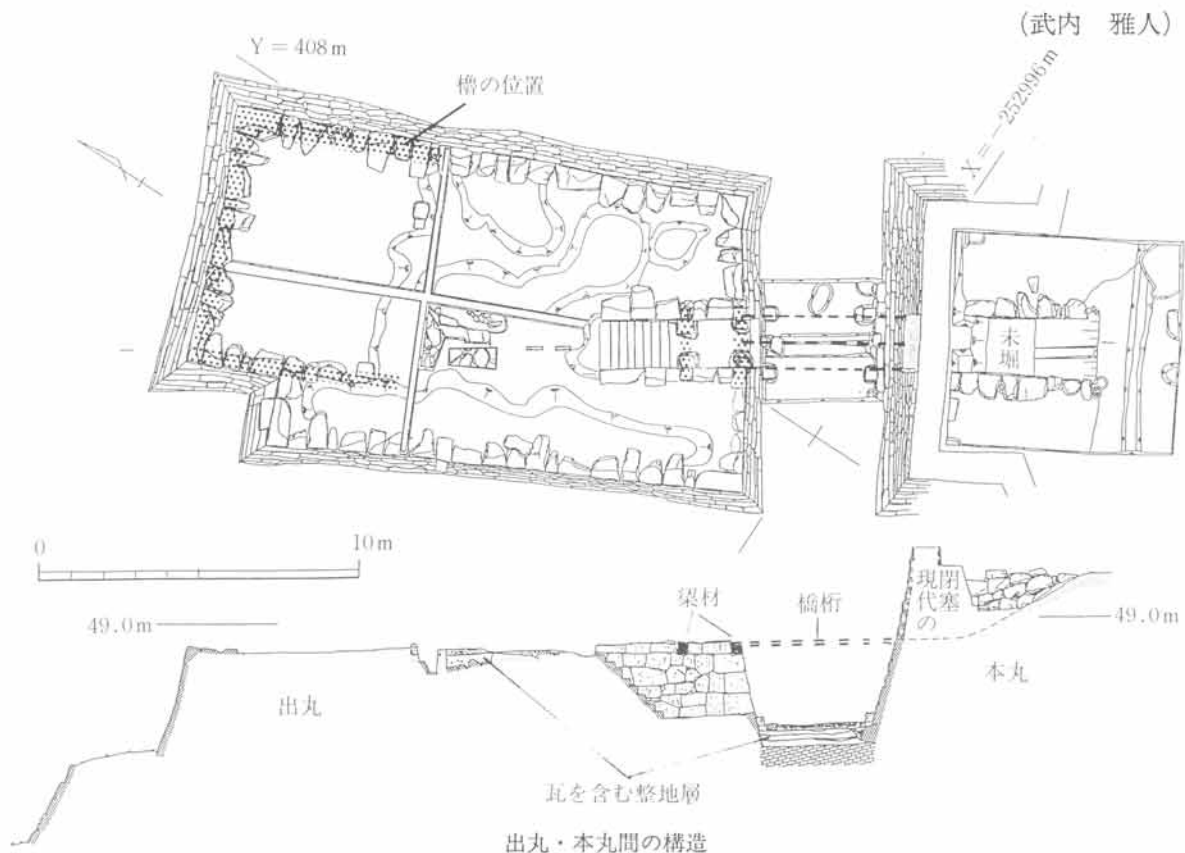
出丸の上部構造

出丸上は大規模な攪乱を被っており建物の土台は失われているが、鍵の手の内角部分に礎石が一つだけ残っており、一辺8m程度の大きさの隅槽が建てられていたものとみられる。隅槽には土塀が取り巻いていたらしく、出丸の石垣には土台据付のための面取り加工がある。出丸上には廃城の際に堆積した地層があり、そこから槽に使われていた鯨・棟込み瓦が出土した。

出丸の出入り

本丸の南側にある犬走りをとおり出丸にいたる階段と、本丸から橋を渡って出入りする方法があった。橋の構造は、本丸側の石垣にある三箇所の橋桁受けのホゾと、出丸入口部にある梁材受けの切欠きのうえに桁をわたして四箇の礎石で支えるものである。本丸側の出入り口は明治以降に埋め立てて閉塞していたが、本丸からは急傾斜のスロープで橋に至る。階段部分には堅固な四脚門がつくられていた。

このほか築城時の整地層から多量の瓦が発見された。この瓦は16世紀から17世紀初めにかけてのもので、築城に際して移転された香林寺もしくは東仙寺の瓦の公算が大である。



根来寺坊院跡（大谷川）の調査

本調査は、根来山内を流れる大谷川の改修工事に伴う発掘調査である。調査地は大塔の南、およそ100mのところ、調査面積は約270㎡である。

今回の調査では、中世と考えられる溝を1条検出したにとどまり、建物跡などの主要な遺構についてはまったく検出することができなかった。このことは、調査地が川の兩岸、崖っ淵という地形上の理由によることで、この付近に塔頭などが存在していなかったことを示すものではないであろう。むしろ遺跡の中心部であることから、この付近には大塔・伝法堂などに伴う諸施設の存在が想定されてしかるべきと考えている。遺物については、さほどの量を数えるものでないが、中で一点、須恵器の杯蓋が出土している。あきらかに根来寺開山以前のものであり、きわめて珍しい出土例と言える。わずか一点であるが、今後調査に当っては留意しておく必要がある。

(村田 弘)

近畿自動車道南部 I・C 予定地内 遺跡確認及び分布調査

調査範囲は周知の遺跡である高田遺跡、高田土居城跡、徳蔵遺跡の一部にかかり、東吉田II遺跡、大年遺跡に隣接する位置にある。これらの遺跡は以前から縄紋土器、弥生土器、サヌカイト等が採集され、周辺の丘陵からは数個の銅鐸が出土している。調査対象地の現状は水田と畑地で、俗に八丁田圃と呼ばれている。

調査方法は、遺跡確認範囲内に3m×3mの試掘坑を21箇所、2m×2mのものを3箇所、1m×9mの試掘坑を2箇所設定した。以上26箇所の試掘坑のうち24箇所で中世の包含層を確認し、このうち7箇所において縄紋時代から中世の遺構を確認した。特に調査地の南西側において、縄紋時代の包含層と遺構ができた。過去にもこの隣接地で縄紋土器が採集されている出土した縄紋土器の大半は中期前葉の船元式である。

(佐伯 和也)

熊野大社旧社地大斎原の試掘調査

大斎原は、平安時代の有名な熊野詣にあたって、音無川を徒歩で渡り、社地に入る「ぬれわらじの入堂」をする潔斎垢離の場として重要であった。この試掘調査の対象となっている部分は、音無川の左岸を含めた旧社地部分であり、6箇所のトレンチを設定した。その結果江戸時代の絵図にある木橋のかかっていた周辺の第2トレンチで二基の根石状石組遺構が検出された。遺物の出土はまったく無く時期の比定はできない。

(松下 彰)

国宝 金剛峯寺 不動堂保存修理の設計監理

不動堂は、建久8年（1197）年八条女院の発願により行勝上人が建立したと伝えられる。八条女院は鳥羽上皇皇女、行勝上人は当代の高僧である。伝承に従えば不動堂の創建は12世紀初頭から13世紀初頭にかけてと考えられる。しかし現在の不動堂は、その建築様式から、実際の建立年代はもう少し下がるとの見解もなされている。その後の不動堂の沿革や修理等を示す記録はなく、詳細は不明である。



不動堂 全景

明治32年（1899）に特別保護建造物に指定、明治41年（1908）に解体移築修理を受けた。その後昭和8年（1933）に檜皮屋根葺替え、昭和38年（1963）に半解体修理、平成4年（1992）に災害復旧による屋根の部分修理をうけて今日に至っている。

不動堂はもとは、行勝上人が五つの坊をはじめ多くの堂塔を建立したといわれる一心院谷にあった。池（一部現存）を南に望み南面していたものが、伽藍地域の南東部へ移築の際には東面に置き換わる。須彌壇及び小屋組に残る番付「東」「西」は、現在ではそれぞれ北と南に相当している。絵図（明治初期と思われる）などによると、建物旧東面（現在の北面）には他の堂宇が隣接して建っており、他三面は三斗であるのにこの面のみが舟肘木であることと、或いは無関係ではないかもしれない。

須彌壇は当初と考えられている。高欄など主な部材は黒朱二色の木目漆、羽目板は黒漆である。高欄の飾金具・擬宝珠の篠より下方には蓮華唐草・魚々子がびっしり刻まれている。木目漆の須彌壇・厨子の類例は、奈良県当麻寺・千体寺、和歌山県浄妙寺などが挙げられるが、いずれも螺鈿が施された“奈良螺鈿”と称されるものである。翻って不動堂は、蓼股の形式などから、京都系工人の手による仕事と思われるので、この辺りの技術的な関連は不明である。

内部床板は、一部取替材を除き、概ね当初材と考えられる。当初材表面には、ほぼ全域に渡り無数に、鋭い刃物で付けたような痕跡がある。これは来迎壁後方の明治の取替材には見られず、従って移築修理以前のものであると思われる。その原因については不明であるが、道具として①武具②工具③法具などが考えられる。仮に①とすれば、京都府大報恩寺の痕跡と比して、短く浅い。また柱等に痕跡がなく不自然である。②であれば、いかなる必然があって仕上げ後に傷を付けたのか。或いは彫刻等の工具跡にしても、広範過ぎる。結果③が可能性が高いのであるが、如何なる法要が営まれたのか、またどのような法具が用いられたのかなど、一切は推測の域を出ない。

* これら不明点に関して、御既知のことをお教え頂ければ幸いです。 （鈴木徳子）

国指定名勝 こかわでらろっかくどう 粉河寺六角堂保存修理の設計監理

六角堂の修理に伴い、柱の板溝に「享保四年（1719）いノ六月十三日棟上仕候」の墨書が発見され、建立年代が確定できた。その後の経緯は不明だが、正面中央間の間仕切りが改造されたのと、正面側半分の土台が近年取替えられた程度で、小屋組みまでよく建立当初の形態を残していた。

建物は一旦全部を解体し、部材は補修或いは取替えのうえ在来の通り再び組み上げた。礎石は2個を除き、沈下が大きいのを据え直し、また2個は磨滅が大きかったので取り替えた。正面中央間の間仕切りは格子戸三枚の開き戸となっていたが、格子戸三枚立てで、両脇がはめ殺し、中央の一枚が引き戸形式の当初の形式に復した。また外陣部分の天井は未完成のままであったので、鏡天井に整えた。なお内陣の仏壇前の亀甲網の金網は、後世のものであったので撤去した。

六角堂は軸組と組物が檜材、軒廻りが檜の良質の材を用い、技法や意匠は優れ、特に六角平面であることは類例も少なく、この建物の存在意義を高めている。また享保5年に再建された現本堂と同時期に、一連のものとして計画建立されており、粉河寺の伽藍を構成するものとして、その意義を再認識しなければならない。（鳴海 祥博）

県指定文化財 こんごうぼ じだいしゅでん 金剛峯寺大主殿など保存修理の設計監理

金剛峯寺大主殿等7棟の檜皮葺き替えは、平成6年度から延べ6ヶ年の計画で開始され、その第2年度に当たる本年度は、檜皮資材の調達と、会下門の屋根檜皮の葺替えを実施した。

「会下」は「エカ」と読み、本来禅宗の用語で、師僧の下に集まって学ぶ所を意味し、高野山では修業のため地方から来山した学僧の宿舎を指し、そこに住まう僧を「会下衆」と呼んだ。会下は通常、通りに面した長屋建物で、会下門はそこに開いた長屋門である。会下はまた参詣者の宿所にも使われ、高野山寺院に特有な建物である。（鳴海祥博）



粉河寺 六角堂



金剛峯寺 会下門

重要文化財 ともぶちはちまんじんじや 鞆淵八幡神社本殿ほか保存修理の設計監理

当社は那賀郡粉河町中鞆淵、紀ノ川の支流である真国川右岸にある八幡山南麓の中腹に鎮座する。寛弘5年(1008)には当荘が既に石清水八幡宮の社領となり、安貞2年(1228)に石清水八幡宮から御輿(現在、国宝に指定されている)が送られている。

中世には下司・公文と神人・百姓層間で激しい武力闘争が起こり、当社は惣結合の精神的な象徴となり、現在においても神社の宮座が下司・公文・十二番頭等の組織を継承し、山間部の小さな庄園であるが、豊富な史料が残された現地には史料と対応する地名や田畑名が継承され、中世庄園研究の絶好なフィールドである。

現本殿は三間社流造・一間向拝付・檜皮葺で、平面は奥行二間を内陣・前面一間を外陣とし更にその中央間一間に向拝を付けた形式で、外陣の側面を板壁と連子で区画する滋賀県に類例の多いいわゆる前室付きの流造りで県内唯一の遺構である。棟札等により寛正3年(1463)に再建されたことが明らかである。

平成8年度までの継続事業として、檜皮の葺き替えと彩色の塗り替えを実施しているが、斗拱に近世初め頃の平彩色の痕跡や扉廻りの配色は現状とは異なる資料が確認できる。

大日堂は旧神宮寺の本堂で、桁行五間・梁間五間・寄棟造・本瓦葺で入側三間四方を内陣・その四周を庇とし正面側のみ奥行きを広め大梁と小天井で処理するいわゆる和歌山式架構方式を持ち、新和様でまとめられ、建立年代は室町時代前期とみられている。(山本 新平)



野地の腐朽状況



軒付の作業中

重要文化財 普賢院四脚門 ^{ふげんいんしきやくもん} ほか二棟保存修理の設計監理

普賢院四脚門は旧行人方東照宮の遺構として、明治25年（1892）に現在位置に移築されている。旧所在地である行人方東照宮は、行人方本山の興山寺（現在の金剛峯寺）の裏山にあり、創建は寛永8年（1631）である。四脚門の建立は、慶安2年（1649）に江戸幕府より領地が特賜された後、興山寺ではすぐに造替に取りかかり、慶安3年春に完成させているのでその時と考えられる。

解体調査によって建立後の修理は、元治元年（1864）に行われていることが判った。これは、化粧軒裏板の墨書「九度山／棟梁／林蔵／元次元年子ノ年／六月十二日よりうら板／はり初之／なぐらむら／下大工里太郎」によるもので、屋根・小屋組・化粧軒裏板に修理の手が加えられている。この修理は、家康の250年忌に向けての準備のために行ったものであろう。

今回の修理工事は、全てを解体する根本修理として行い、旧来に復するために調査によって判明した以下の事について現状変更を行った。

1. 西南方に約60センチメートル移築する。（四脚門の保存を良好にするために隣接している建物の軒と離すため）
2. 屋根銅板葺を檜皮葺に復し、棟の形式を整える。（屋根の葺き材を旧来の物に復原する）
3. 棧唐戸の格子を菱格子花狭間に整える。（後補の棧唐戸格子の形態を本来の形に復原する）
4. 前面両袖の後補の透し彫刻を撤去する。（後補の部材を撤去する）
5. 控柱の石製礎盤を木製に復するとともに、石製の唐居敷を木製に整える。（柱足もとの部材の材質を復原するとともに形態を整える）

また、剥落・退色が著しく判然としなかった彩色塗装の復原調査を念入りに行ったことにより、当初の彩画・彩色を復原することができた。

なお、並行して金剛三昧院四所明神社本殿と上杉謙信霊屋の檜皮葺屋根の葺替修理も行った。いずれも、前回の修理より25年以上経過し檜皮は耐用年限に達し、軒先部分では雨漏りも生じて木部に影響を及ぼし兼ねない状況であった。（佐藤 信芳）



金剛三昧院四所明神社本殿正側面全景



上杉謙信霊屋正側面全景

重要文化財 ^{じゅうさんじんじや}十三神社本殿 ほか二棟保存修理の設計監理

社伝によれば十三神社は延暦3年(748)に創建、天神七代、地神五代の諸神を祀り、当時は神野郷十三神社と称したという。以来十二社大権現として崇敬を集めたが、天正年中伊予の河野氏が戦いに敗れてこの地に落ち、守護神である大山祇神を合祀し、十三神社と改めたと伝えられる。現在の社殿は三間社流造の本殿と、その左に一間社春日造の摂社丹生神社本殿および八幡神社本殿の二棟が並び、三棟が並立している。本社本殿の妻飾りは、二重虹梁大瓶束で身舎妻中央柱上に特異な花肘木を置いて虹梁を受ける。また、内外障境の内法貫上に彫刻を嵌めて欄間風に見せるなど珍しい手法がみられる。摂社八幡神社本殿の建立は、昭和47年(1972)の解体修理の際に、支外垂木から永禄4年(1561)の墨書が発見されて建立年代が確定したが、本殿およびもう1棟の摂社の建立については、資料がなく不明である。しかし、摂社八幡神社本殿との建築様式手法の差違はなく、同時期の建立であるといえ、社伝にいうところの天正年間の造営とも合致する。

建立後の修理については記録を欠いて判然としないが、近年の明治27年(1894)屋根葺替、大正11年(1922)屋根葺替・部分修理、昭和24年(1949)屋根葺替・部分修理、昭和42年(1967)屋根の応急修理、そして昭和47年(1972)の解体修理(国庫補助事業)が判っている。

当神社各本殿は、県内における桃山時代の建造物として、元亀3年(1572)建立の野上八幡宮摂社武内、平野今木神社本殿、慶長11年(1606)建立の天満神社本殿、同19年(1614)建立の宝来山神社本殿にいたる神社建築の様式変遷を知る上で、三船神社各本殿の建築とともに重要な位置を占めるものである。

社殿は前回修理より23年が経過し、檜皮葺屋根の経年破損による屋根面の摩耗が著しい。各社殿とも全面に檜皮が摩耗し葺足は全く判らず、筋状に水の路ができています。妻駒額、箕甲は上目皮の飛散が見られ筋状の摩耗も深い。また、二重軒付け上段は裏板まで雨水が回り腐朽している。



本殿および摂社丹生神社本殿の正側面全景

下段の軒付けにも雨水が廻り湿潤な状態になっている。妻軒付けは、水切銅板の切損により水が廻り、黴状の苔が発生している。特に正面向拝部分の屋根勾配の緩やかなところでは傷みが著しい。

塗装の状況は、3殿共に彩色の剥落・黴の発生、胡粉の剥落、丹塗の剥落、退色が著しい。

今回の修理は、屋根葺替と彩色の剥落留めを行う。
(佐藤 信芳)

県指定文化財 りきしじんじや 力侍神社本殿ほか一棟保存修理の設計監理

平成7年8月から解体修理をおこなっている力侍神社は、和歌山市の中心部から東北に約9km、紀ノ川北岸の平野部に位置する。力侍神社は天手力男命を主祭神とし、本殿の向かって右に、八王子権現を祀る八王子社が摂社として建てられている。

力侍神社の創立は定かでないが、「紀伊国神名帳」にある「従四位上兩手力男神」に想定されている。「紀伊国神名帳」の成立時期も確実でないが、鎌倉期のものかともされており、中世には神社が成立していたと推定される。「紀伊続風土記」の記述によると、元は現在地より約1km北西の神波村に在ったが、その後その地より北西へ約1kmの上野村の八王子社境内に移され、さらに寛永3年(1626)に八王子社とともに現在地に移されたと伝える。この「八王子社」は、熊野九十九王子社の一つ「川辺王子」とされ、現在の摂社八王子神社本殿がこれに当たると考えられる。

現在の社殿の建立年代は、今回の修理の際に棟札が発見され、力侍神社本殿が寛永11年(1634)、摂社八王子神社本殿は寛永元年(1624)であることが確認された。本殿と摂社は、各部の寸法に違いはあるが、様式的にはほとんど同一であり、一連のものとして造営されたと考えられる。

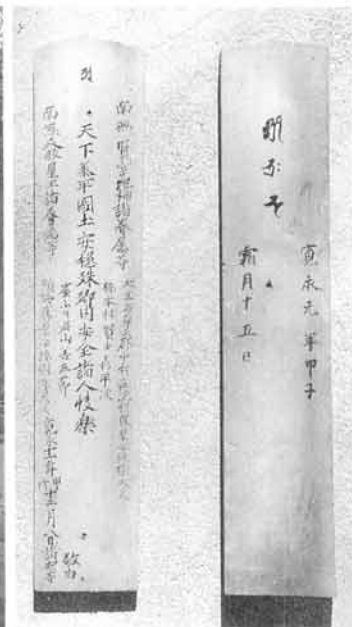
修理に際する解体調査により、ある時期に屋根葺き材が柿葺きから檜皮葺きに変更され、それに伴って小屋組が改修されたこと、また、旧基壇上に切石が積み上げられ、社殿全体が持ち上げられたこと等が明らかとなった。今回の修理では、基壇全体を修理前より約23cm低くし、屋根は柿葺きに復元する予定である。

彩色の全面塗り替え等をおこない、全ての工事が完了するのは平成10年3月末である。

(寺地 聡彦)



力侍神社 修理前



発見された棟札

重要文化財 ^{うじやくじあみだどう} 雨錫寺阿弥陀堂保存修理の設計監理

雨錫寺は有田郡清水町杉野原にある高野山真言宗の寺院である。有田川上流に位置する山深いこの地は中世史上著名な高野山阿弮河庄上庄の一部であり、茅葺き民家が点在する簡素なただずまいは今なお荘園の世界を彷彿とさせる。杉野原には重要無形文化財である御田跳が受け継がれており、その舞台となる阿弥陀堂も平成3年に重要文化財の指定をうけた。寺蔵の記録によれば阿弥陀堂は永正11年（1514）に現在の川津明神社境内に移転したとされ、同じ史料に記されている永正13年に鐘楼堂が建てられたことが古鐘銘により確認されていることから、阿弥陀堂もほぼ同じ頃の建立と考えられる。しかし直接その時期を示す史料が無く、川津明神社自体が慶長年間に現地に移転したとする史料もあるため、今回の修理を期に建立年代が明らかにされることが期待される。

方五間に茅葺寄棟の屋根を持つこの建物は背面の板壁をのぞき概ね四周に建具が入らない開放的な仏堂であり、内部にも建具は一切無く、内陣と外陣等の区分は架構のみで表現されている。これは多分に御田跳の舞台としての必要に応じた形態を取っていると考えられる。また当地方で中世から見られる極めて簡略な鳥居構造を持つ小屋組の多くが当初材であると考えられるなど、概ね建立当時の形態を保っていると考えられ、紀伊続風土記にも記される古式な宗教民俗儀礼と中世に遡る大規模で本格的な五間堂が一体となって保存されてきた様子が伺われる。しかし、柱に残る板溝や腰貫、鴨居、壁小舞等の痕跡から、中古には四周を柱間装置で閉鎖していた時期もあったことが明らかであり、近隣の清水町中原の阿弥陀堂等にも見られる建物の後陣に設けられた囲炉裏に象徴されるような中古の状態などからも、雨錫寺阿弥陀堂の機能の変遷を綿密に検討することが求められる。今回の修理工事では、現状変更を含めた修復を明確な根拠のもと円滑に行えるよう平成7年10月より平成9年12月までの27ヶ月の期間で建物のすべてを解体し、併せて調査を行いながら工事が進められる。

(多井 忠嗣)



雨錫寺阿弥陀堂西側面全景



内陣床板割付けの復原考察状況

和歌山市指定文化財 かいぜんいんたほうとう 海禅院多宝塔保存修理の設計監理

海禅院は景勝地和歌浦に浮かぶ小島「妹背山」に所在し、境内は妹背山東側の岩盤（緑泥片岩）を削りだし、さらにその東に盛土をした造成地にあり、多宝塔はその壇上に位置する。

塔内本尊である法華経題目碑背面の刻銘によれば、慶安2年（1649）に徳川頼宣の生母お万の方（養珠院）が家康の三十三回忌の追善を発願し、後水尾上皇をはじめとし全国から法華経首題七字（南無妙法蓮華経）を二百五十万回書き写した片石を集め、石巖を鑿ってこれを納めたという。

『紀伊続風土記』によると、二十余万個の片石を納め巨大な題目碑と小堂を建立し、養珠院が承応2年（1653）に亡くなったため、徳川頼宣がこの堂を改め二重の宝塔（多宝塔）を建立し、塔の前面に拝殿・唐門・水閣等を建立したという。また、『南紀徳川史』によると慶安2年（1649）に首題七字を二百五十万回書き写した片石を納めその上に宝塔を建立したと記載されており、史料により若干の差異がある。

木構造については通常の三間多宝塔で、その点については特異性を有するものでないが、題目碑を本尊に見立てるという特異な塔で、一部に禅宗様の様式がみられるが、全体としては和様を基調としている。様式上から17世紀中期の造立になるもので、藩が直接かかわり藩の御大工が携わったとみられ、良質の総檜造の正当な手法になる上質の多宝塔で、類例の非常に少ない日蓮宗の多宝塔として貴重な遺構である。

この保存修理事業は当初本瓦の葺替・縁廻りの修理等の計画であったが、部分解体の結果下層部分は白蟻による被害が非常に甚大なことと、昭和9年の台風により、上層が転倒し、応急的な修理であったため手先の肘木の折損が判明したことにより、事業費の増額と期間の延長が生じた。

このため、下層南面の4本の柱を抜取り、取替えと補修をし、不陸分は取替材・根継材で調整した。上層は大斗から上部を一旦ジャッキ・アップし2段目の肘木までを解体し台輪までを調整のうえ折損・割れ・腐朽した部材を取替えるとともにステンレス材による構造補強を行った。2段目の隅肘木に「明暦元年（1655）乙未八月吉日」の墨書が発見され造営は相当の期間を要したことが確認できた。

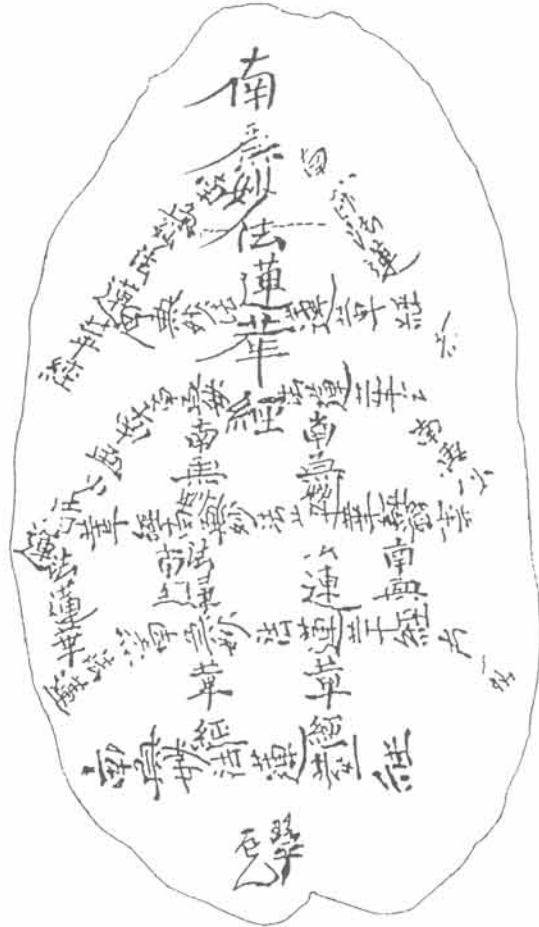
木部の修理と並行して、塔下部の石室について確認を行った。岩盤を縦約2.1m、横約1.7m深さ2.4m以上掘り、上部に砂岩切石を積む。現在も非常に多数の片石が納められており、底部は確認できない。経石は殆ど全て扁平な緑泥片岩でごく一部は変成岩と貝殻が混じり、首題七字を連書する。特異な例として首題七字で多宝塔を描くものや放射状、紀年銘、書写の回数等を記載したものが確認された。

この多宝塔は、歴史的な景勝地である、この和歌浦の景観を構成するうえでも重要な要素であるとともに、その歴史的な経緯や多宝塔と、その内部と地下の石室に祀られた経石にかかる信仰形態を知るうえでも貴重な資料である。

（山本 新平）



下層柱の取替修理



経石 経描多宝塔



石室の状況

重要文化財 ^{ちやうらくじ}長樂寺仏殿保存修理の設計監理

長樂寺は有田郡吉備町植野にある臨濟宗の寺院である。13世紀半ばに亀山上皇により真言宗寺院として七堂伽藍が建立され寺領が与えられたと伝えられる長樂寺は、13世紀末に日高郡由良町興国寺の開山、法燈国師心地覚心の隠居所となり、禪宗に転じたとされる。仏殿は、桁行三間、梁間三間、一重もこし付、寄棟造、本瓦葺の建物で、組物は尾垂木付禪宗様二手先詰組、もこし出三斗、軒は二軒扇垂木、もこし一軒半繁垂木、床は四半敷の本格的な禪宗様仏殿である。

修理工事は解体修理で、平成4年10月より36ヶ月の予定工事期間で開始され、平成7年度においては、左官工事、基礎工事、建具工事、仮設の撤去等を行い、9月に工事の総てを完了した。総事業費は2億2200万円であった。

今回の解体に伴う調査により、以下のことが推測された。

・長樂寺の創立年代

基壇の発掘調査により、13世紀築成の基壇に建つ前身建物が火災にあった後に、その礎石を利用して現状の仏殿が建っていることを示す遺物が出土し、13世紀の創立を裏付ける結果と成った。

・長樂寺仏殿の再建年代

仏殿の解体に伴い発見された身舎組物の墨書（合番付）と各部に用いられた様式手法により、寺藏文書に記された天正5年（1577）に再建されたものと考えられる。

また同上の発掘調査でも、基壇が15世紀以降に創立時期より更にかさ上げされた様子が明らかとなっており、再建の状況を示している。

・仏殿の整備、改造の変遷

修理に伴う各部材の痕跡調査より、建物の変遷が概ね明らかとなった。

天正再建当初　　：軒が未完で藁葺きの仮屋根。もこしは軒が疎垂木で葺き足の粗いこけら葺。

17世紀中頃　　：もこしの屋根が瓦葺きになる。

宝永8年（1711）：軒と小屋組が整備されほぼ現状の本瓦葺きとなる。もこしは解体され軸部材の大部分を取替え、組物と軒が修理された。須弥壇が新造された。

延享4年（1747）：北面軒廻りと小屋組の修理、向拝の新設、正面中央間扉廻り改造。

寛政13年（1801）：来迎壁が撤去され仏壇が設けられる。

天保12年（1841）：東側面の出入り口の変更。

長樂寺仏殿は虹梁や大瓶束を多用して、広い内部空間を確保しようとする架構表現等に見る禪宗様建築の中世末における流れや、箆彫り等に象徴される紀州の装飾建築の影響など時代や地域性を強く反映した貴重な歴史資料である。今回の修理においては当初の設計意図が最も完成した時期として18世紀初頭の姿に復すべく、現状変更が行われた。（多井 忠嗣）

和歌山県指定文化財 ^{にちじんじや} 日神社本殿保存修理の設計監理

日神社は西牟婁郡白浜町十九淵の富田川河口の左岸に鎮座し、旧富田荘の産土神で富田組回船の奉納品を数多く保存している。

本殿は大規模な一間社隅木入春日造、檜皮葺、軒唐破風付の社殿で、様式・手法よりみて17世紀末から18世紀初頭の建立になるものである。部材の随所には多様な建築彫刻（獅子・象・龍・麒麟・鳳凰・魚・鶴・天女・雲・波・若葉・菊・蓮・牡丹・松・竹・俱利伽羅龍王剣・力士と行司・二十四孝・亀甲地紋彫・等々）と丹塗及び極彩色が施され、装飾を主眼とした華麗な社殿である。

平成6年度からの継続事業として檜皮葺屋根の葺替えと小屋組の一部補強を行った。今回の修理において小屋組の梁と枇杷板に文政7年（1824）「造立・棟上」の墨書が発見され、棟札にある文化8年の屋根葺替より13年後において小屋組を修理している事・銘文の内容・庇の木鼻・実肘木・桁が取替えられその彫刻に差があることからして、文政7年には斗拱を相当解体する大きな修理が実施され、現在の彩色はこの折のものあるとみられることが判明した。

当地は熊野参詣道のうち「大辺路ルート」にあたり王子社が勧請された。当社はもと『若一王子権現』と称され、類似調査を行った王子神社本殿（すさみ町周参見、19世紀前期再建）との類似点が多く見られる。この社殿は熊野造（王子造）ともいわれる社殿形式を知るうえでの資料であり、今後類似遺構の比較検討が必要である。 （山本 新平）



身舎斗拱の彫刻類

和歌山県文化財センター 平成7年度概要

I 事業概要

1 受託事業

埋蔵文化財発掘調査事業 14件 出土遺物整理事業 1件

文化財建造物保存修理設計監理事業 11件

2 委員会の開催

役員会・評議員会 平成7年6月22日

理事会・評議員会 平成8年3月22日

3 発掘調査委員会 紀伊国分寺塔跡発掘調査 平成7年9月28日

4 現地説明会

高尾遺跡発掘調査（共催；高野口町） 平成7年8月12日

紀伊国分寺塔跡発掘調査（共催；打田町） 平成7年10月14日

華岡清州・春林軒塾発掘調査（共催；那賀町） 平成7年12月6日

新宮城（丹鶴城）跡発掘調査（共催；新宮市） 平成8年3月24日

5 概報・報告書の刊行

華岡清州・春林軒塾発掘調査概報 根来寺坊院跡（大谷川）発掘調査概報 西庄遺跡跡掘調査報告 新宮城（丹鶴城）発掘調査概報 熊野本宮大社旧社地大斎原試掘調査報告

高尾遺跡発掘調査報告書 金剛峯寺遺跡（尼僧研修道場）発掘調査報告書 小松原II遺跡発掘調査報告書

6 普及事業

『紀州の歩み』 -文化財の発掘調査・保存修理の速報展-

期間 平成7年7月21日～8月8日 会場 紀伊風土記の丘 第3展示室

II 職員名簿（平成8年3月31日現在）

専務理事（事務局長兼務） 中谷 博昭

事務局次長（平成7年6月1日～平成7年11月30日 兵庫県派遣）（平成7年12月1日～平成8年3月31日 埋蔵文化財課長兼務） 菅原 正明

主査 西本 悦子 主査 武内 雅人 文化財建造物課長 山本 新平
（管理課長心得）

主事 森 和美 " 富加見泰彦 主任 鳴海 祥博
（9月退職）

" 松尾 克人 " 土井 孝之 技師 佐藤 信義

埋蔵文化財課長 松田 正昭 " 井石 好裕 " 多井 忠嗣

（平成7年12月1日～平成8年3月31日 兵庫県派遣） " 村田 弘 " 寺地 聡彦

主任 松下 彰

和歌山県文化財センター年報

1995

1996年6月

編集
発行

財団法人 和歌山県文化財センター

(担当 松下彰)

印刷 西岡総合印刷株式会社

